

●「ふくやま文学」(広島県) 32号

瀬崎峰水氏の「負け犬」は問題作というべき衝撃力を持っている。自殺未遂で入院してきた女性患者を医師と病院の立場から叙述する冷徹な筆致が始まるが、この鬱病の原因になっているレイプ事件が、思いがけなく女性看護師が治療の試みに渡したレポート用紙に手記として書かれ、大きく広がってくるところに、現実の残酷な牙と問題の根の深さが露出する。レイプの描写は被害者の主体叙述として克明で、加害者の男の中に潜む残忍性や獣性が、どのように容赦なく高校二年生の少女を破砕するか、追真性を持つてぶつけられてくる。事件以後少女の内面の遍歴が始まるのだが、これが小説としての肉付きを持つのは、腕に「負け犬」と刺青を彫る展開が加わるためである。まもなく両親が会いにくるそのことを知った少女が隙を見て病室のガラスを割って頸動脈を突き刺し自殺を遂げる結末でストーリーは閉じるものの、この小説には、どこまでも不可解さが残る。その不可解さが、逆に現実の凶器性を醸し出し、不思議なりアリティで迫ってくる。パードウォッチングのことが頭を占めている担当の精神科医、強姦されたこ



とを非難する父親、その父親と会うことが嫌で死に飛び込む女性主人公、腕に「負け犬」と刺青をする行為、その四方に散るベクトルの辻褄の合わなさが、むしろ背理として不気味な闇の存在を暗示するところに、この小説の真の深さが窺われる。優秀作。ただ、今期は間に合わなかったので、時期に回したい。

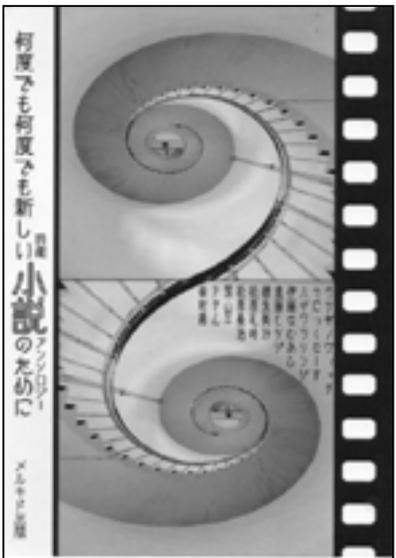
「ふくやま文学」の代表は中山茅集子氏から大河内喜美子氏に移ったが、中山氏の筆は健健で、この号にも「いとおいしい骨」という作品が載っている。相変わらず文章筋肉は旺盛で、弾む文体が恥骨を骨折したりハビリ体験を、赤ん坊が生まれる人生の扉に繋げて、生きる深みを開いている。少し離れるが、姉弟誌とも言える同じ井上光晴文学伝習所の流れを汲む「クレーン」(群馬県) 41号で、「中山茅集子作品を読む」という特集を組んでいる。タイムリーで、

今取り上げるにふさわしい作家として拍手を送りたくなかった。文学伝習所時代のことなど、現在でも学ぶべき示唆を含んでいる。

姉弟弟子としてわだしんいちろう氏が「ふくやま文学」と「クレーン」それぞれに小説作品を載せていて、目を魅いた。「再会」と「くノ一」という作品だが、筆の流れは快く繋がっていくものの、どちらもちょうど入口に立った所で終わっているのは、少し物足りない。これから何かが始まるところで放り出される不燃焼感、スタミナが足りなくなっているのか、とやや気になる。

●「何度でも何度でも新しい小説のために 前衛アンソロジー」(愛知県) 創刊号

この長いタイトルの同人雑誌は、前衛を標榜している



ころに特徴があり、参加している書き手がそれを貫いているのが、爽快な野心を映じている。愛知県出身か、愛知県にゆかりのある書き手が興じていて、主張を体現している尖鋭さは勢いがある。なかでも「螺旋状の瞳」(幸村燕)は、幻想と現実の錯綜が、一つの世界を構築していて、前衛の主張理論を具体化させている。書いている文章の中の世界と、現実とが交わり、ときどき溶け合って不思議な繋がりと錯綜をなしながら、また書き出しに戻ってくる円環型の構造は、おもしろいが、ここに新しい起爆剤が潜んでいるかどうかは、まだ断定できないところではある。具体的な描写やストーリーは拒否しているように見えるものの、骨格のない建築がどこまで可能かは、未知数である。現在では3Dプリンターの工法など可能になりつつあるので、ひよっとしたら何か生まれてくるかもしれない。新しい小説は新しい理論を当然内包しているもので、その普遍性と発展性が前衛の運動として回っていくはずである。もしこれが先細りや痩せ衰えを見せていくなら、真の前衛領域としても、挑戦しないところには出発はない。その意欲に賭けたい。推薦作とした。

●「たまゆら」(滋賀県) 114号

「たまゆら(玉響)」といううるわしい和語に依ったこの誌は、永く佐々木国広氏が育んできたものだが、次号から



京都の中川一之氏に移る過程での、佐々木氏最後の編集になる号である。一一四号の継続は、称讃に値する。

この号の中に、桑山靖子氏の「当麻曼茶羅」という作品がある。予備選考を委託している廣瀬武久氏が、99点という高得点をつけて推奨してきた作品は、確かに充実した読後感がある。粗筋は、早産で死んだ赤子の魂が彷徨い続けるのを追って、生命世界の本源に到達するという流れだが、その過程で中将姫が織ったという「当麻曼茶羅」の縁起に触れたり、折口信夫の「死者の書」の一節が蘇ったり、地藏の供養をしたりして、日常の底に眠っている世界が開かれてくる展開が、深層を掘り起こしてくる。ふつう古典を引用したり、その世界に依拠したりすると、皮相になって足元を失いがちだが、この小説はそれが逆に成功し、それ



●「ら・めえる」(長崎県) 79号

この誌は、長崎ペン・クラブの発行で、興味の湧く運営形態を窺わせる。総合文芸誌となっていて、小説作品や詩や俳句よりも、論説文や、記録、ドキュメントの方に華々しさが見える。巻頭の「逆立ちした公共事業『石木ダム』」はダム建設に対し論理の通った真つ向からの追及がなされた告発文で、地方政治に堂々と立ち向う姿勢は気合いが入り、これで実際の政治が動けば、さらに実質の備わったものになる。記録文も「朝鮮通信使の使行録に記述された吉岐・対馬」(草場里美)、「長崎県の戦時型機帆船建造史(6)」(西口公章)など、歴史記録を詳細に掘り上げた

それが息づきを深くしている。到達した生命観もみずみずしく、融和の覚醒感もたらされる。会話と日常がそもそも遠い乖離感に染まっている恨みがあるものの、古典に依存しつつ、その奥にある世界を掘り下げた開拓は大きい優秀作である。

巻末の佐々木国広氏の「みみずく屋」も熟成の味があった堪能した。古書店を営む夫婦の軋轢と和合の綾織りが、一つの人生の姿を象徴していて、胸に染み入ってくる。筆は健在で、いい味を自然に出している点では、むしろ熟達を感じさせる。準優秀作。

●「弦」(愛知県) 106号

巻頭作「睡蓮」(長沼宏之)は、落ち着いた穏やかな文章の中に、心を溶かしてくるような慰撫感がある。企業で違和感を持ちながら働く主人公が、精神を病んで、リハビリの集いに通ううちに、やはり精神を冒されてリハビリ中の女性と仲良くなる。睡蓮の絵を通じて密接になり結婚する。子供が流産し、彼女はおかしくなる。病と再発の危機を抱えながら、これからの生を抱きしめ合い、覚悟するストーリーは、快い流れに乗りつつ一方で狂気の恐怖を漂わせている。穏やかな筆致が、病をうまく包み込んでいるように見えながら、行末を案じさせる余韻が残る。睡蓮のスケッチや実際の睡蓮の花が、狂気と結びつく点にもリアリティがある。優秀作としたい。



●「弦」(愛知県) 106号

ドキュメントは、価値が高い。特に注目されるのは「裏切られた自由―ハーバート・フーバー元米大統領の『大事業』」(長島達明)で、これは第三十一代フーバー大統領の自伝を軸に、その軌跡を追いながら、太平洋戦争や後のルーズベルト大統領の行動を別な角度から浮かび上がらせている。「アメリカは大戦に参戦しない」ということを公約にして当選したルーズベルトが、むしろ画策して議会に参戦を決議させた過程など、興味深い歴史事実が浮かび上がり、新しい視点を鮮やかにしてくれる。日本一般に普及すべき論点を提供している。この誌はこうした領域に極めて豊かな鉱脈があり、視点の高さや普遍性を備えている。ただ、「微用工問題は存在しない」(藤澤休)は、明ら

かに言い過ぎて、「南京虐殺は存在しなかった」と同類の過誤を犯している。朝鮮に対して犯した大きな歴史事実を見ずに、表面的な現象だけを日本人に都合のいい視点からだけ見ている判断は、通用しないだろう。

●「茶話歴談」(大阪府) 2号

歴史小説を書く熱烈な仲間が集まって作った観のあるこの誌は、希有な歴史小説同人雑誌だが、中身はその情熱が迸っていて、ぐんぐん読ませていくおもしろさに満ちている。ロマンを失いつつある現代において、歴史の中にそれを求める熱情は、ここにも大きく燃え上がって見える。どの作品にも熱が詰まっている。三三〇頁は立派。

なかでも巻頭の「血まみれ大膳、出雲の鹿に挑む」(真



淡々としている。それに輪をかけて主人公を産んだ母親は、人物像がぼけていて、シングルマザーとしての苦悩も抵抗もないように動いている。読み進めていくうちに、祖父の妾の子供の紗代など、果たして登場させる必要があったのか、首を傾げなくなる。最後に「透」が、主人公に異性として近づき、「家守」の存在に変化が訪れるところは、やっとな人間が動き始めた感を持たせるが、「家守」という言葉を巧く解くために全体が作られているように思えてしまうのが、無理筋に思えた。次回を期待したい。準優秀作。

和田信子氏の「青葉山公園」は、高校時代の同級生の子供が六十年を経て突然訪ねてくる話で、その時の隔たりが懐古の扉を開く中に、人生の深い姿を見せる仕立ては、腕のいい彫師のような手腕が感じられる。その友人は高校卒業後、入社もない自分を会社に訪ねて来て、そのまま門



全国同人雑誌振興会

弓創)は、豪傑武将の山中鹿之介に挑む毛利方の豪傑品川大膳の一騎打ちまでの軌跡を描いて、手に汗握る戦国絵巻を展開している。戦国時代にこのような一騎打ちがあったことも新鮮だったし、有名な山中鹿之介の立ち姿がこのような角度から照射されるのも、新映像だった。現代からするとやや大袈裟な人物像や闘いへの執念も、一つのロマンの中に生動するとき、むしろ自然なダイナミズムとなって躍動する。歴史小説の傾斜への本源を示しつつ、死によって逆に立ち上がってくる人間の生き方を明確に示してくる。読後に大膳の姿が永く残り、同時にまた山中鹿之介の姿も鮮やかに残る。ここに光を当てた歴史小説作家としての慧眼を称えたい。推薦作。

●「南風」(福岡県) 46号

実力者揃いの「南風」だが、今回は、全体に地味で、落ち着き過ぎている印象を覚えた。

紺野夏子氏の「家守」は、設定はおもしろく、仕掛けも揃っている出だしたが、モノトーンの展開でストーリーに起伏が乏しく、世捨て人めいた雰囲気、もう一つ盛り上がり上がっていない。主人公は母が短大生のとき妊娠した子を祖母が母親として育てる父なし子だが、お人形のようにおとなしいのが、よくもあり、悪くもある。普通はどういうして自分には父親がないのか、父親はだれか、いろいろ悩み考えるのだろうが、この主人公は悟り切ったように、

前で救急病院に運ばれ病院で子供を産む。しかし病院の費用を払えないまま、子供を置いて失踪し、青葉山公園で心中する。残された赤子は孤児院で育ち、彼女が子供といっしょに九州まで母親のことを知りたいと来たのだった。心中した事実をそのまま話せずに、交通事故と偽って、事実ではない母親の像を告げるのだが、なんとなく結像していく結果になっているのが、苦しさを感じる。娘が会いにくると知った時点で、すでに心中のことを思い出すはずだし、それを告げるべきか隠しておくべきか悩むはずなのに、心中をあとから出してきて、あっさり隠すのは、欺瞞の匂いが残る。またなぜ青葉山公園なのか、必然性も乏しい。話を紡ぐ力は旺盛で手腕を感じるが、順序を取り違えていることが、結像を鈍くしている。準優秀作。

●「狐火」(埼玉県) 24号

澤つむり氏の「おんば」は、筆の流れはせせらぎのような流麗さで、諧謔やウィットにも富み、おもしろく読めるのだが、この作品はおもしろさのほうを追い過ぎて、文学としての陰影は、乏しくなっている。高校時代の同窓会に体育の女性恩師を招くために、苦勞して、その家を訪ね、来てもらう話だが、いつのまにかそれよりも「おんば」という奇怪な老女のキャラクターが強くなって、それに圧倒されるオチになってしまっている。筆は立っておもしろいのだが、元気で風変わりな世捨て人以外に何が残るかとい



うと、やや寂しい。純文学としてはむしろ白骨になっていくほうがいろいろ掘り下げられたかもしれない。腕は買うが、題材とその取り扱い方がぬるい。準優秀作。

巻頭の「秘密のお庭」は、センスのある女性たちの生き方振り返り小説だが、ブティックを経営したり、フランスに遊んだり、有名人と交際したりする優雅な生活を語り紡ぐものの、何か表層だけ追っているようで、内面に深く届いてくるものがない。どんな生き方をしていても、身を切られるような孤独や自殺したいような絶望はあるはずで、潇洒な庭は、それらを負ってこそ、輝きを持つように想われる。筆がそこまでは到達していないのは惜しまれる。

●「群青」(東京都) 94号

「群青」の94号の継続は立派だと思っていたら、編集後記

人たちに甘えが生じ、作品を発表することに、真剣さや緊張感が薄れていった気がしないでもない」と記してあることからすると、相当な負担がかかっている、それをひたすら情熱で支えていたことになる。頭が下がる思いだが、なんとか後を引き継ぐ有志はいないのだろうか。

高橋光子氏の「赤いワンピースの女」は、その色彩とともに、妙に胸深くに残るものがあり、ここまで印象を長く引き摺るものは何なのだろうか、としばし考えずにはいられなかった。ストーリーは南アフリカへの旅行の上にある。そこで出会った赤いワンピースを着た一人旅のドイツの老年女性との短い同行が、思いの基軸になって巡り始める。

「ヴィクトリアアフォールの空港前の広場で、赤いワンピースの彼女が乗り込んだおぼろ小型バスを思い浮かべているとき、朝子はなんとなく死のお迎えということを考えて死んだ最期に重なってくる。親友は死を間近にして鮮やかな夢を語る。「大きな車に一人ぼつんと乗っているのよ。どこへ行くのだろうと運転手さんに聞くと、『お慕だ』と言うじゃない? そんなところへ行くのは、嫌! 今すぐ下ろしてちょうだいって頼んだんだけど、運転手は自分にそんなことを言われても困る。自分はただ迎えに行けと言われただけだからと言うの」そしてその三日後に親友は亡くなる。



に「この号で終刊になる」とあって、驚いた。残念である。作家集団「塊」の河林満が主宰者の高橋光子氏をしばしば話題にしている、一度訪ねようとは思っていたものの、河林が急逝し、またこちらも多忙になって果たせなかった。この号には「群青」総目録の後半が載っており、その中に河林満の名前が三度出てくる。その号を求めたくなった。

もともと、この誌を取り上げようと思ったのは、巻末の「赤いワンピースの女」が印象に残ったからである。編集後記を読んだのはそのあとだった。

「書き手も読み手も高齢化し、これ以上続けられなくなった」「普通同人誌はページ数に応じて費用を分担し、作品を載せるが、『群青』は同人費だけで掲載費は取らないできた」「それが果たしてよかったのか、悪かったのか。同

「あのときから朝子の心の中には、無意識のうちに死ぬとさ迎えに来る車のイメージが住み着くようになっていたのだろう。そしていよいよ死を間近に感じるようになって、それが表面に浮かび出て、赤いワンピースの彼女が乗ったおんぼろバスのイメージが重なったのかもしれない——死を受け入れるアフリカのような果てしない地への回帰と同一感がある。死への旅立ちを匂わす一つの訣別がここに漲っていることがこの小説の本質だろう。推薦作としたい。

今季をまとめる。

優秀作 「負け犬」 瀬崎峰水「ふくやま文学」32号

「当麻曼荼羅」桑山靖子「たまゆら」114号

「睡蓮」長沼宏之「弦」106号

推薦作 「血まみれ大膳、出雲の鹿に挑む」

真弓創「茶話歴談」2号

「螺旋状の瞳」幸村燕「何度でも何度でも新しい小説のために 前衛アンソロジー」創刊号

「赤いワンピースの女」高橋光子「群青」94号

準優秀作

「みみずく屋」佐々木国広「たまゆら」114号

「家守」紺野夏子「南風」46号

「青葉山公園」和田信子「南風」46号

「おんば」澤つむり「狐火」24号